第2章　ときわ公園の現状と課題

1　沿　革

ときわ公園は、元禄１１年（1698年）頃に灌漑用として常盤池が築堤され、昭和３３年（1958年）に常盤遊園地の開園、昭和３６年（1961年）に第１回宇部市野外彫刻展の開催、昭和37年（1962年）から昭和39年（1964年）に宮大路動物園をときわ公園へ移設するなど、戦災復興の象徴、市民の憩いの場として、公園整備が進められてきました。

現在は、県内初の国の登録記念物（名勝地関係）として登録され、日本の都市公園１００選、さくら名所１００選、「２１世紀に残したい日本の風景」総合公園として第１位、美しい日本の歩きたくなるみち５００選、ショウブ苑の「池坊花逍遥１００選」、新日本歩く道紀行１００選シリーズにおける「文化の道１００選」、そして「世界かんがい施設遺産」に認定されるとともに、次世代エネルギーを活用する取組が経済産業省から「ときわ公園次世代エネルギーパーク」計画として認定されています。また、ときわ動物園や植物館のリニューアルなど、総合レクリエーション及びアミューズメントパークとしての魅力も増し、癒し・憩いの場、また観光施設として多くの方々に愛されています。

2 施設と資源

ときわ公園は、本市の東部に位置し、市民のオアシスとして、また「緑と花と彫刻のまち」のシンボルとして、常盤湖を中心に緑あふれる広大な自然を残す、面積１８９haの総合公園です。

平成２８年（2016年）３月にグランドオープンした「ときわ動物園」は、野生動物の生息環境を再現することで本来の行動を発揮させる「生息環境展示」を特徴とし、飼育頭数日本一を誇るシロテテナガザルは木々を自由に飛び回り、国内の動物園で唯一ハヌマンラングールを展示するなど、全国でも特色ある動物園です。

「緑と花と彫刻の博物館」（愛称：ときわミュージアム）は、全国でも珍しい植物と彫刻の複合博物館として開館し、平成２９年（2017年）４月には、植物エリアを改修し、「世界を旅する植物館」としてリニューアルオープンしました。リニューアル後は、「世界を旅し、感動する植物館」をコンセプトに、植物館内を世界の植生環境を意識した8つのゾーンに分け、各ゾーンを代表するシンボルツリーや季節ごとの花や果実を展示しています。

また、ＵＢＥビエンナーレ彫刻の丘では、昭和３６年（1961年）以来、６０年続く世界で最も歴史ある野外彫刻の国際コンクール「ＵＢＥビエンナーレ（現代日本彫刻展）」を２年に一度開催しています。

ときわミュージアムと体験学習館“モンスタ”では、様々なワークショップや展示が実施されるなど、環境学習拠点の機能も有しています。

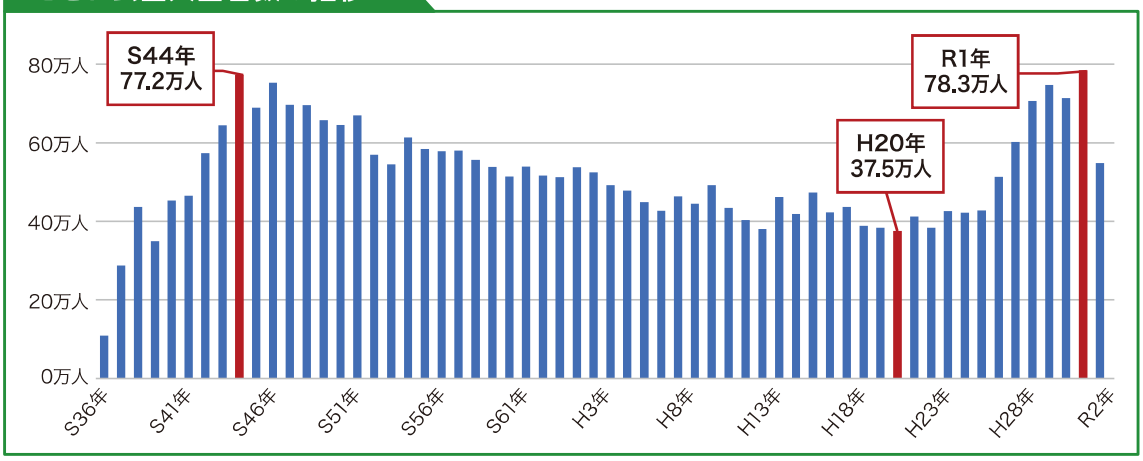
その他、本市の発展の礎となった炭鉱の歴史を展示する石炭記念館や、大型遊具が設置されている県内屈指の遊園地もあり、県内外からの観光客が増加しています。また、園内各所に設置した花壇や北部の園路沿いなどに咲く四季折々の花々を観賞する人や、常盤湖周辺を一周する周遊園路をジョギングや散策をして楽しむ人など、年間を通じて多くの市民の憩いの場にもなっています。

3 年間入園者数の推移

昭和44年(1969年)にピークとなる77万人を記録した年間入園者数は、その後減少に転じ、平成20年(2008年)には37万人台まで落ち込みました。こうした状況を打開するため、平成22年(2010年)に「常盤公園活性化基本計画」を策定し、その後は活性化基本計画に基づいて、ときわ公園の魅力の向上に取り組んできました。

近年は、動物園と植物館のリニューアルや光と音を利用したイベントの実施、TOKIWAファンタジアをはじめとした既存イベントの充実など、ハード、ソフトの両面から誘客対策に取り組みました。その結果、平成28年(2016年)からは、入園者数が70万人を超えましたが、令和2年(2020年)は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、54万人台まで減少しています。

ときわ公園入園者数の推移



ときわ公園の主な収入と支出の推移

(百万円)

年　度	平成 28 年度 (2016年度)	平成 29 年度 (2017年度)	平成 30 年度 (2018年度)	令和 元 年度 (2019年度)	令和 2 年度 (2020年度)
入園料等収入	140	139	114	111	66
管理運営費	485	571	523	605	479

※管理運営費は、維持管理費及びイベント費の合計額で、職員人件費は含まない。

現状

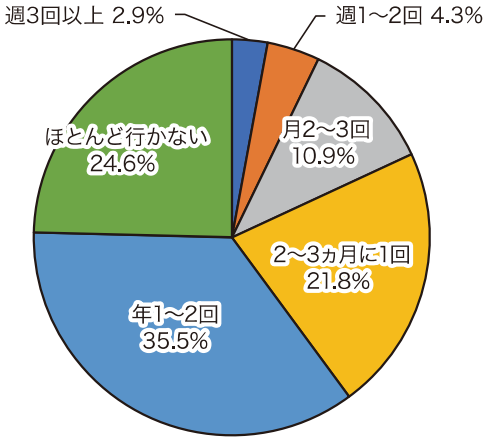
① ときわ公園活性化基本計画に基づき、市民の憩いの場や観光施設として、施設整備やイベント、食やお土産品、情報発信の充実などに取り組んだ結果、入園者の増加につながりました。今後も、持続可能な公園運営を確立するためには、収支のバランスを図りながら計画的な維持管理と魅力向上の取組が必要です。

② 動物園や植物館のリニューアルオープン以降、年間入園者数は令和元年度(2019年度)までの4年間、70万人を超えましたが、令和2年度(2020年度)には、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、54万人台まで落ち込んでいます。観光事業者等の民間事業者との連携事業や、動物園、遊園地などのイベントや情報発信などのソフト事業の充実による入園者数の回復が必要です。

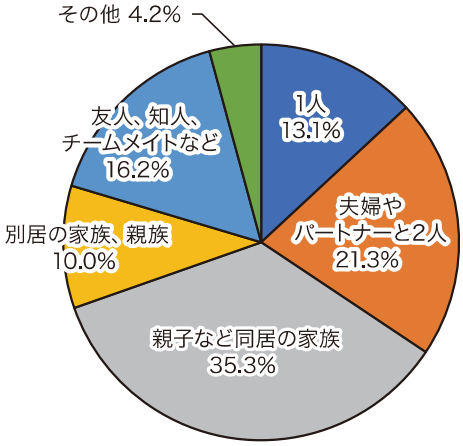
4 市民の意見（アンケート調査）

・調 査 期 間：令和3年(2021年)5月～6月
・調査対象者：宇部市内に居住する18歳以上の方から無作為抽出
・調　査　数：3,000件
・調査票回収数：1,025件（回収率34.2%）

(1)来園頻度について

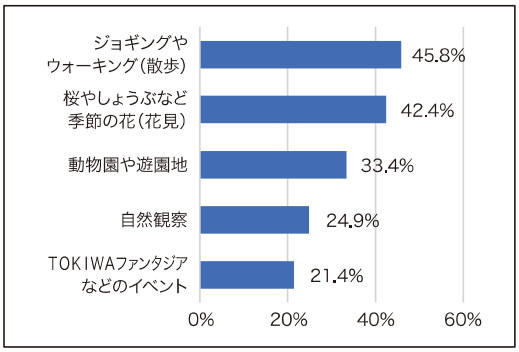


(2)来園時の同伴者について



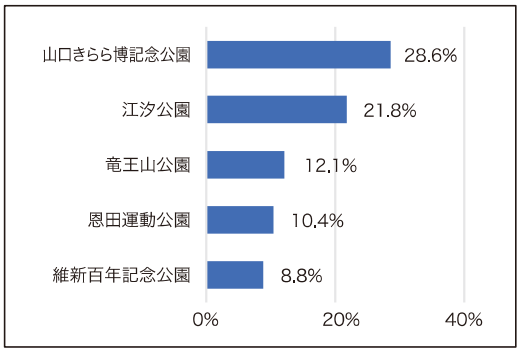
(3)来園する目的について

（上位5項目）



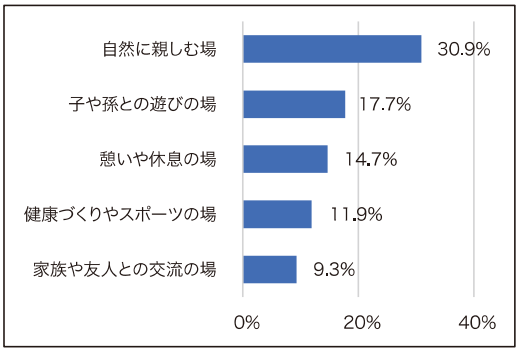
(4)ときわ公園以外でよく行く公園について

（上位5項目）



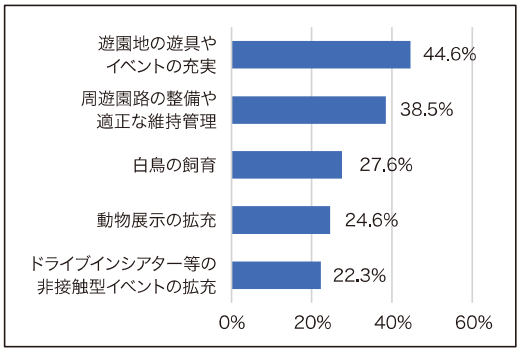
(5)自身にとってのときわ公園の位置づけについて

（上位5項目）



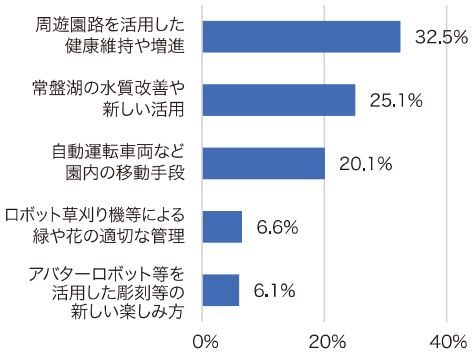
(6)今後、力を入れるべき取組について

（上位5項目）



(7) ときわ公園実証フィールドで希望する事業提案について

（上位5項目）



(8) その他、自由意見について

（多かった意見を要約）

- アスレチックや大型遊具の設置
- 駐車場の無料化
- 有料施設の市民優待
- トイレの改善及び拡充
- キャンプ場の改善
- 周遊園路の夜間照明の改善
- 湖を活用したアトラクション導入（カヌー・ボート等）

現状

グラフ（1）（2）から

③ 約18%の市民が、ときわ公園を月1回以上利用されている反面、約4分の1の市民がほとんど利用しないと回答しており、市民の誰にとっても魅力ある公園づくりが求められています。

④ 約70%の市民が、夫婦や同居の家族などと一緒に利用しており、乳幼児から高齢者まで市民の誰もが楽しめ、憩いの場として利用できるような取組が求められています。

⑤ ジョギングコースやテニスコートなどの運動施設が設置されている「きらら博記念公園」と「江汐公園」や、自然林を残しながらキャンプ場が整備されている「竜王山公園」が多く利用されており、運動施設やキャンプ場の魅力向上が求められています。

グラフ（3）（4）（5）（6）から

⑥ 来園の目的では、ジョギングやウォーキングなど、常盤湖周遊園路の利用者が最も多く、今後取り組む施策としても、周遊園路の整備と維持管理が2番目に多くなっています。誰もが安心して利用できるような、周遊園路の整備や維持管理が求められています。

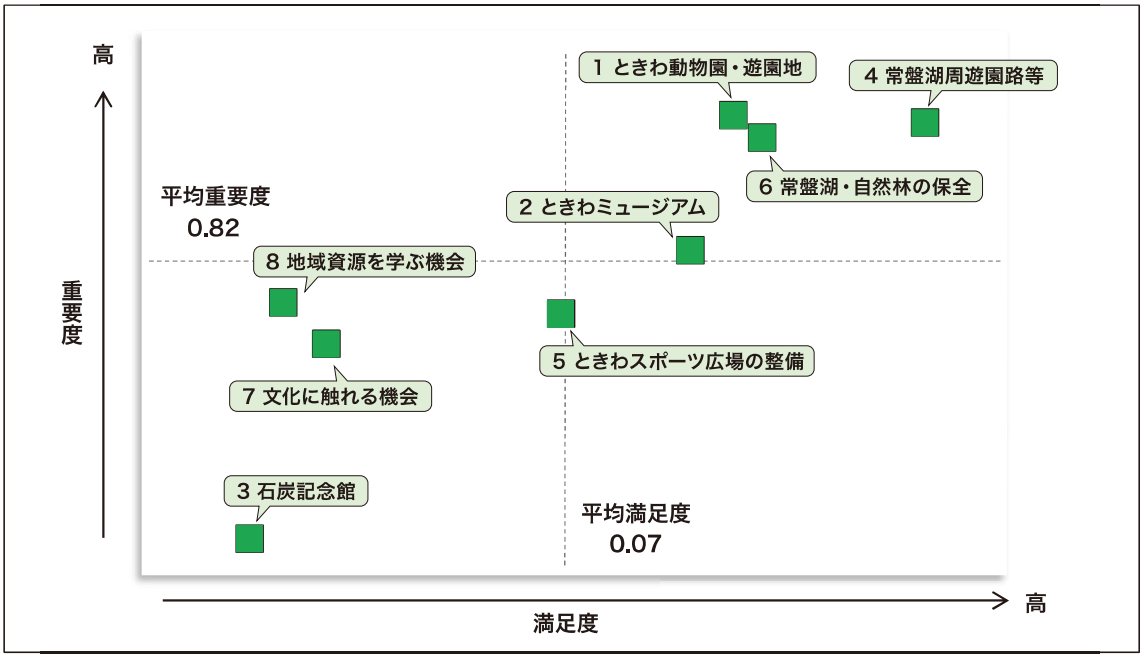
⑦ ジョギングなどの次に季節の花や自然観察を目的に来園される市民が多く、また、ときわ公園の位置づけでは、自然に親しむ場と感じられている市民が最も多くなっています。北部の自然林の保全活用と合わせて、四季を通じて園内の花壇や花木を楽しむことができるように、魅力ある花壇づくりや周遊園路沿いの花木の充実が求められています。

⑧ 今後取り組む施策としては、遊園地の遊具やイベントの充実を望む意見が最も多く、来園目的でも動物園や遊園地の利用が3番目に多くなっています。遊園地の魅力向上のために、民間事業者と連携した遊器具やイベントの充実と適正な維持管理が求められています。

⑨ 約4分の1の市民がハクチョウの飼育を求めており、自由意見のなかにも常盤湖の新たな活用を求める意見が多くみられますので、常盤湖の利活用の検討が求められています。

（9）これまで取り組んできた主要施策の「満足度」「重要度」について

項　目　名	満足度	重要度
1　ときわ動物園・遊園地	0.42	1.22
2　ときわミュージアム	0.33	0.86
3　石炭記念館	-0.59	0.09
4　常盤湖周遊園路等	0.82	1.20
5　ときわスポーツ広場の整備	0.06	0.69
6　常盤湖・自然林の保全	0.48	1.16
7　文化に触れる機会	-0.43	0.61
8　地域資源を学ぶ機会	-0.52	0.72
平　　均	0.07	0.82



「常盤湖周遊園路等」に関する取組が重要度も満足度も高くなっている一方で、重要度、満足度ともに平均値より低い取組として、「石炭記念館」が挙げられています。

現状

グラフ（9）から

⑩ これまでのときわ公園の施策については、ほとんどの施策が右上に位置しており、重要度、満足度ともに高くなっていますが、3石炭記念館だけが左下に位置しており、石炭記念館のあり方について、検討が求められています。

⑪ 7文化に触れる機会や8地域資源を学ぶ機会の充実は、重要度は平均値付近にありますが、満足度は平均値を下回っています。本市を代表する文化であり、地域資源でもある野外彫刻を次世代に引き継ぐとともに、シビックプライドを醸成するために、野外彫刻を学ぶ機会の充実や適正な維持管理が求められています。

⑫ 5ときわスポーツ広場の整備は、観光、スポーツ、文化の施策全体の中では、重要度は平均値、満足度は平均値をわずかに上回っていますが、ときわ公園の施策の中では、いずれも平均値を下回っていますので、スポーツ広場の魅力向上の取組が求められています。

5 計画の進捗状況

（１）目標の達成状況

平成２８年（2016年）2月に改定した「ときわ公園活性化基本計画」に基づき「年間入園者数８０万人」の達成を目指して、ハード、ソフト両面の施策を展開してきました。その結果、目標年次の前年である令和元年度（2019年度）には７８万人を超える入園者があり、目標の達成が目前に迫りましたが、目標年次の令和２年度（2020年度）には、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、入園者は５４万８千人にとどまりました。

	平成 28 年度（2016年度）	平成 29 年度（2017年度）	平成 30 年度（2018年度）	令和 元 年度（2019年度）	令和 2 年度（2020年度）
目標値	70 万人	75 万人	80 万人	80 万人	80 万人
実績値	70.5 万人	74.6 万人	71.2 万人	78.3 万人	54.8 万人
達成率	100.7 %	99.5 %	89.0 %	97.9 %	68.5 %

※実績値について、平成29年度（2017年度）以降は、駐車台数からの推計値とスポーツ広場利用者数を合計した人数を記載

（２）施策の実施状況

「ときわ公園活性化基本計画」に掲載した２６９施策のうち、終了または完了したものは、動物園の「自然の地形や樹木を活かした遊び場の創出」など１５８施策、今後も継続するものは、植物館の「サボテンの保有品種数日本一に向けた取組」など９０施策となっており、実施率は９２．９％になっています。これらの施策を展開した結果、令和元年度（2019年度）まで順調に来園者を増やすことができました。

今後も、ポストコロナ社会の中にあっても、ソフト面を中心に施策を展開し、広大な自然を持つ緑豊かで集客力のある都市公園を目指します。

なお、未着手の２１施策のうち、今後も継続して取組むものは「スポーツ広場や周遊園路活用者のためのシャワー施設等の検討」など３施策、内容を一部変更して継続するものは「秋に紅葉が楽しめる環境整備」など３施策としています。

（ときわミュージアム 世界を旅する博物館）

6 ときわ公園各施設共通の課題

(1)現状や市民アンケートから

	課題の背景
■ ポストコロナ社会の新しい日常のなかにあっても、多彩なイベントの開催やオリジナル商品の開発などにより、魅力をさらに磨き上げ、入園者の回復を図る必要がある。	現状① 現状②
■ 平成20年(2008年)頃と比較すると入園者は増加していますが、人件費の高騰や施設の老朽化などにより、管理運営経費も増加傾向にあり、収支バランスを図りながら、誰もが楽しめる魅力ある都市公園としての管理運営が必要である。	現状①
■ ポストコロナ社会の新しい日常に対応しながら、市民の憩いの場として、年齢や性別、障害のあるなしに関わらず、市民の誰もが訪れたくなる魅力的な公園づくりが必要である。	現状③ 現状④

(2)政策課題

【市民との協働・共創の推進】 ■ 年齢や性別、障害のあるなしに関わらず、市民が活躍できる場を提供するために、ボランティアの育成に取組みながら、企業やボランティア団体等との連携を強化して、市民との協働と共創により公園運営を支えていく体制づくりが必要である。(見直し)	政策①
【新型コロナウイルス感染症への対応】 ■ ポストコロナ社会を見据えた新しい日常への対応とともに、注目が集まっているワーケーション等への対応やキャンプ場の整備を、民間事業者などと連携しながら取り組む必要がある。(新規)	政策②
【アートによるまちづくりの推進】 ■ 彫刻を通じて、様々な人と人との交流の場を創出できるように、誰でも参加できるプログラムの開発が必要である。(新規)	政策③
【新たな成長産業の創出】 ■ 新たな公園利用者として企業等の民間事業者を位置づけ、ときわ公園実証フィールド活用プロジェクト(愛称:「ときチャレ」)を活用しながら、地域産業の振興と公園を活性化することにより、若者が地元に定着したくなるまちづくりに取り組む必要がある。(新規)	政策④

※前計画の課題の一部変更…(見直し)
第3次計画の新規課題…(新規)

(3)目指すべき方向性

ポストコロナ社会の中にあっても、ソフト面を中心に施策を展開し、広大な自然を持つ緑豊かで集客力のある都市公園とともに、新たな成長産業の創出を目指します。また、本市の主要な観光資源として、各施設等の魅力の磨き上げと新たな魅力の創出に取り組み、本市の観光交流を推進します。